

提出先：鹿児島県離島振興協議会 御中

## R4年度鹿児島県アイランドキャンパス事業

### 報告書・提言書

#### 『硫黄島の交流人口の拡大を図るための観光振興の方策』

事業内容：①提案内容の現地検証

②検証に基づき現地報告会（三島村開発総合センター集会室にて）

③帰着後の報告書・提言書の提出

実施場所：鹿児島県三島村硫黄島

実施期間：2022年11月17日（木）～11月26日（土）10日間

事業者：流通経済大学社会学部国際観光学科 山崎良夫ゼミ3年ゼミ生3名+教員1名

住所：千葉県松戸市新松戸3-2-1

電話：047-340-0001

Email：[yyamazaki@rku.ac.jp](mailto:yyamazaki@rku.ac.jp)

参加者：1. 魚沼 純平（リーダー） 2. 岩葉 泰成 3. 笹原 宇翔 4. 山崎 良夫（教授）

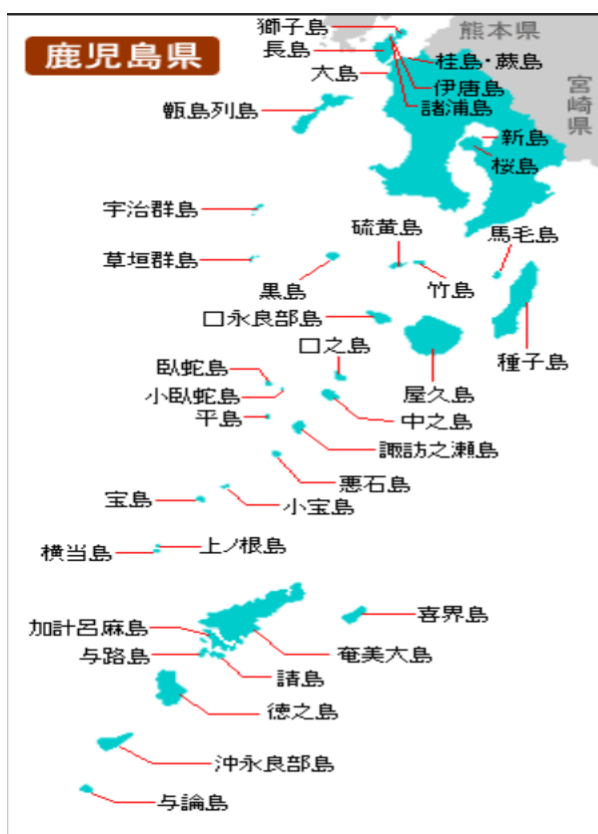
はじめに・・・

鹿児島県離島振興事業の一つの本事業を本校の掲示板掲載から知ることが出来、ゼミの中での夏休み期間中の取り組み課題として3年ゼミ内で案内したところ、かなりの関心興味を持った学生が多くいたが、提出期限（7月15日）が迫っており正味2～3週間程度の中、最終的に最後まで取り組んだ学生3名の1グループの計画案を提出するに至った。もともとは夏休み期間中の実施で計画し、結果、採択されたのが8月に入ってからもあり、いざ実施の段階では、各人ももとの予定が外せなかったり、10月実施の国家資格試験の受験前であったり、9月、10月は難しく、12月以降は例年の天候不良によるフェリー欠航への危惧とのアドバイスから11月の実施とした。その11月17日に前泊で鹿児島に入り、翌日のフェリーで硫黄島に向かう予定であったが、天候不良により連日の欠航、実際に硫黄島に入島できたのは11月20日（日）の午後、それから25日（金）の出航まで5日間、当初より滞在期間が短くなったが充実した観察期間となった。

観察、調査については学生が主体となり、私も含め各人、各項目に分担しながら進めたため様式、形式、文章に統一性が無いなど、読み難かったり、又、知識不足、勉強不足による失礼な表現などをご容赦ください。

## 1. 鹿児島県の離島

事業を実施するにあたり、鹿児島県が全国有数の離島県、長崎県に次いで2番目に離島数を有する県で、有人離島数が28は、日本で一番多い県あること。離島延べ面積約2,482 km<sup>2</sup>、離島人口は149,620人を有する。温帯から亜熱帯に渡る南北約600 kmの広大な県域に広がる島々は、真っ青な海をはじめとする温暖で豊かな自然環境や個性的な伝統文化、健康的な特色ある郷土料理など、個性あふれる島々が広がる自然に満ちた地域であることを事前に学び直した。



## 2. 三島村の硫黄島選定の理由

鹿児島県では、1993年にユネスコの日本の世界自然遺産に「屋久島」、2021年にも同じく世界自然遺産に「奄美大島、徳之島」が登録された。古くから鉄砲伝来、フランシスコ・ザビエルの布教活動で歴史的にも有名で、現在ではJAXAの宇宙センターのある「種子島」、その他にも観光資源としても近年メディアを通じて目にする機会が増えた島々がたくさんある中で、失礼ながら私たちが知らなかった「離島」に着目してみようと考え、鹿児島港から最も至近距離にある三島村を選ばせてもらった。呼び名の通り三つの島、「竹島、硫黄島、黒島」から三島村と命名されており、中でもアフリカ音楽の「ジャンベ」を学ぶアジア初の「ジャンベスクール」を有し、2015年に世界でも珍しい離島の「三島村・鬼界カルデラジオパーク」として登録され、野生化した「孔雀」が多数生息するという「硫黄島」に魅力を感じ、他の既に有している数々の観光的資源から、今よりも交流人口の拡大の可能性を調査すべく選定した。

## 3. 硫黄島について

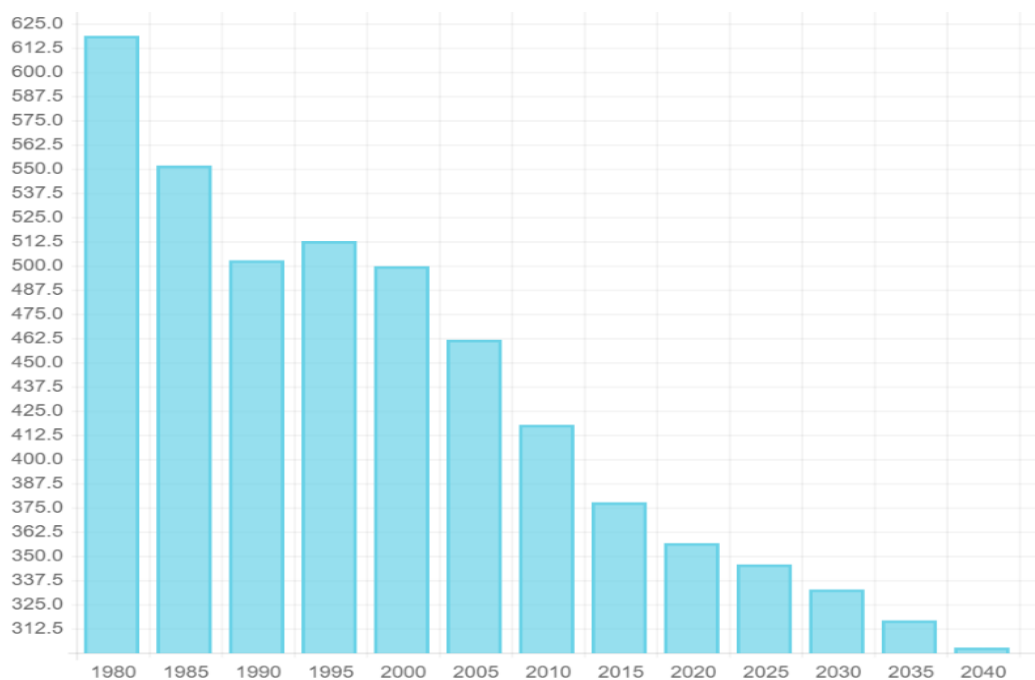
### 1) 深刻な人口減少

三島村の昭和35年国勢調査では1,363人を数えた人口も、昭和45年の国勢調査では655人と10年間で半減した。それ以降も減少の一途をたどり、平成12年の国勢調査では、500人となり40年間で865人(63.4%)も減少した。また平成18年4月現在の65歳以上の人口の占める割合は、約34.8%(142)と高齢化が著しく進んでいる。村内には高等学校がなく、毎年10人前後が中学校卒業と同時に、村外の高等学校進学のために村を出て行くが、卒業後に帰村する者はなく「若者が去り老人が残される」という過疎地特有の人口減パターンとなっている。これ以上の人口減少は、地域の維持さえ難しくなることが懸念されることから、村はU・Iターン者の定住奨励を重点施策に据え、村外からの移住者を募り、移住の家族には子牛1頭(50万円相当)をプレゼント、更に家族数に応じ3年間、生活助成金を毎月支給し、新築の1戸建て庭付きの村営住宅を格安な家賃で提供するという「定住推進対策事業」に平成2年度から積極的に取り組んできた。その結果、平成18年4月現在、30世帯81人の方々が村に移住され村の貴重な労働力として活躍している。人口の減少に歯止めを掛けるには、就業機会、特に若者の働く場を創出し、定住促進対策事業を強力に進める必要があるが、本土と隔絶された小離島の能力の限界から、企業誘致は難しい状況にある。また、観光の振興についても、天候に左右される週3便の船便のみでは、おのずから限界がある。

また、村には農協・銀行等、資金融資を行う金融機関がないため、農林水産業資金や住宅建築資金等に対する、村独自の融資制度(年利1%)を創設し、産業の振興と民生の安定化に努めている。

硫黄島は、周囲19.1km、面積11.74km<sup>2</sup>と三島村の中では一番大きい島であり、人口は126名(2022年10月1日)、今回訪問させていただいた硫黄島学園の生徒は1

年生から9年生で24名、高齢者比率は25.3%と、三島村全体の中では若い人が多い島という印象であった。また、私たちが入島する前月には、「島婚」という出会いのイベントも実施され、離島留学「しおかぜ留学」も既に実施しており、交流人口の拡大を図る取組みを行政が主導していることもわかった。



<三島村の人口減少推移予測>

## 2) アクセス

### ・定期船フェリーみしま

鹿児島港から三島村各港区間の運航を、週3便から4便に増便されているということでしたが、私たちの訪れた11月の下旬は週3便の運航であった。往路の11月17日、18日と天候不良（さほどの雨量ではなかったが、強風の影響と考える。）で欠航し、19日の入島となった。往路の約4時間はこれからの目的地硫黄島への期待感もあり、長くは感じなかった。

### ○鹿児島本港から各島への行程と所要時間（目安）

鹿児島本港→約3時間→竹島→約30分→硫黄島→約70分→黒島（大里）

→約30分→黒島（片泊）→約4時間→鹿児島本港

約1,859トン、全長89.6m、最高18.79ノット、定員170人

### ・航空路セスナ（NJA 新日本航空）

村営、週2往復、片道約50分、乗客3名、鹿児島空港～薩摩硫黄島空港  
島民割あり、通常片道3万円と高額になるため、一般の観光客には使い難いか。

1970年代のリゾート開発時に開設、バブル崩壊後、1993年に村に移管され、今は島

民の緊急時対応、島民割を利用したビジネスとしての利用が主と聞く。

しかしながら、滑走路を保有し、セスナの離発着が可能な空港としての機能は今後の可能性を秘める施設である。

### 3) 宿泊施設

- |               |         |
|---------------|---------|
| ○イオキャラバンパーク   | 収容 15 人 |
| ・ 民宿硫黄島       | 収容 25 人 |
| ○民宿ほんだ        | 収容 30 人 |
| ・ 民宿がしゅまる     | 収容 38 人 |
| ○民宿マリンハウス孔雀の里 | 収容 15 人 |

以上が、HP に掲題されていた宿泊施設で、今回の事業では○印の 3 か所にお世話になった。イオキャラバンパークは、硫黄島の岩壁に面したキャンプ敷地にトレーラーハウスが 5 台設置されており、小グループ、ファミリー向けアウトドア志向の来客に適している。民宿 2 軒は、女将さんの明るく気さくな人柄が、家庭的で旅の疲れを癒してくれる居所となった。

### 4) 就労体験

畜産、水産、林業（タケノコ）が主たる産業であるが、今回、地区長さんから紹介をいただき、80 頭以上の牛を育てる畜産家の米村さんの施設を訪れ、放牧施設のほんの一部の金網の取り換えを行わせていただいた。牧草を求めて移動する牛たちの行く手の草むらの先は岩壁もあり、その安全性を確保しなければならない。広大は放牧地のいたるところの金網が硫黄の影響もあり、脆く、錆びついており、老朽化が進むため、その張替を絶えず行わなければならない。大変な作業の日々を送られている。ここで生まれた子牛、それを丹念に育てあげ、本島に引き渡すまでの飼育が主たる業務とのこと。その大変さの一部分を垣間見れたことは貴重な体験であった。

### 5) 特産品のいくつか・・・

・硫黄島は、樺の自然林が島中を覆い尽くしておりその景色は壮観である。その樺から、食用、薬用など古くから使用されており、現在でも女性の黒髪を艶やかに装う頭髪湯、シャンプー、リンス、石鹸と多様に使用されていた。私たちが宿泊した宿でも各施設その商品が浴室、洗面所に置かれていた。

・硫黄島で収穫された「さつまいも（べにおとめ）」が、隣の黒島に運ばれ、その良質な水で焼酎として醸造されたもの。銘柄も硫黄島の厄払いの神様「メンドン」をあやかり焼酎の銘柄として 2019 年から販売。まだ新しい特産品の一つである。お土産に購入させていただき、来る正月、元旦にいただこうと思う。

#### 4. 硫黄島への交流人口拡大を図るための観光振興の方策（事前）

2. で述べたように、硫黄島へのアクセスの不便さを補うために来島観光者の数よりも観光消費額を増やすことが重要であり、そのためには長期滞在が不可欠。さらに長期滞在することで、島の魅力をより知ることができ、また理解を深めることが可能になる。結果、来島観光者数が少しでも増加し、将来、観光産業に関わる人、施設、モノが増え、消費流通が活発化すれば将来移住者も増え、それが定住者へとなることが目論めるかもしれない。そのためには、長期滞在に見合う観光資源、観光ツールが少なく、周知不足なのではと考えた。

今回の調査では、その受け皿としての着地型観光に着目して検証することとした。

着地型旅行の普及が必要な背景として、LCC（ローコストキャリア）の普及があげられ、その普及で観光のあり方も大きく変わろうとしている。大都市圏からでも鹿児島まで安価に利用することができるようになり、今まで以上に幅広い層の利用が見込め、何度もリピートしやすくなることで簡単に旅行がし易くなってきた。その結果、観光客も増加し地域の活性化につながる可能性を秘める。まだまだその域ではないにしろ、将来、離島もその目的地として同じことが言えるのではないだろうか。

#### 5. 硫黄島の観光資源について（現地調査、検証）

##### 1) 硫黄島観光所でいただいた観光マップ



大変見易く、滞在中の移動の目安に役立った。内容も正確であり、もともと大きな島でな

く、観光資源への道路も整備されており、また途中途中の道標も正確で滞在中も迷うことなく行動できた。

2) ネットに掲載されていた硫黄島学園の生徒が作ったマップ



島への愛着が感じられ、温かさのあるマップであり、またよく学習している効果も感じられる。実際に祝日の際に宿泊先から近かったため学校を訪れた際には、祝日でも学校で楽しく遊んでいる元気な小学生の生徒たちが、在校されていた先生方の許可をいただき、校舎の中を案内してくれ、中庭にある池が硫黄島を模っており、一つ一つその説明をしてくれる生徒たちのその詳しさに感心した。

・提案

観光マップに記載されたいくつかのスポットのスタンプラリーも着地型、自由行動などの散策に効果的ではないか。今回の滞在中に訪れた硫黄島学園の生徒さんたちの手作りの各観光スポットでの自分たちの映っている写真をいただいたが、生徒たちの表情がとても楽しそうで、もらってうれしい記念品であった。それをスタンプラリー達成者に記念品として渡すと喜ばれる思い出の品となるであろう。

3) 観光資源の調査（滞在中に検証できた資源のみ）

①硫黄島港

離島の港と聞くと、一般的にはスカイブルーの鮮やかで透き通った水を想像する。しかし、硫黄島港では唯一無二である褐色の海が広がっていた。初めて硫黄島の港に着いた時は、この褐色の海が非常に印象的だった。世界の海について調べてみても珍しく、稀

に少し茶色がかった海を日本や世界でも見られることがあるが、それは環境的に悪い物質が流れている汚染であったり、泥が混じっていることが多い。硫黄島の港のような、硫黄が混じっている天然な水は唯一無二であり、立派な観光資源であると確信した。また、この硫黄島港が他の地域にない唯一のポイントとして、水中での記念撮影があげられる。水中カメラマンによる、褐色とスカイブルーの狭間で撮る写真は、まるでオーロラをバックに写真撮影をしているようだ。この写真は、往路復路のフェリーの中にプロカメラマンによる水中撮影写真として飾られていた。ノルウェーやカナダで見るオーロラは、気候条件によって見え方が大きく変化したり、見ることにできない時もあるが、この硫黄島港で撮る写真は、水に潜れる限りは無条件で写真撮影をすることができる。硫黄岳と並び、この島のシンボルと言えるような観光資源である。

- ・可能性

島全体の受け入れ体制が不十分のため、多くのダイバー客などが島に訪れることができないことが挙げられる。しかし、それは長期滞在客を増やして、観光客数よりも滞在期間を伸ばすことによって解決できるものだと考える。

## ② 硫黄岳

滞在二日目の 21 日に地質学者の大岩根博士のガイドで硫黄岳を登った。

硫黄岳の象徴的ポイントである硫黄の噴煙を間近で見ることができるこの山は、既にある程度登山を経験している層にも、全国にある活火山と大きく異なるため人気が出るのが期待される。また、私たちは中腹までの登山ではあったが、序盤から壮大な自然を感じる山中で、噴火で落ちた大きな岩を登っていると仲間との絆が深まる効果もありそうだ。また、山中には地層があらわになっている場所があり、登山好きにはもちろん、地層が好きな人には魅力的な場所だ。硫黄岳に関する観光資源の優位点として、硫黄島を代表する観光スポットであること、2015 年にジオパークに離島として登録認定されたことに伴い、専門的なネイチャーガイドによるガイドランスが受講できること、約 7,300 年前の縄文期に巨大噴火が起きた場所であり、今もなお噴火を続けている。これらの特徴は、他の島ではできないような貴重な体験で観光資源として秀でていると考える。

- ・問題点

実際に登山をして感じたことは、風向きが悪く、噴煙が登山道側に吹いている場合は噴出している場所の近くに寄ることが困難なことである。私たちが登山をした日は運よく近くに寄ることができたが、天候が悪い日、風向きが悪い日は登山に適していない場所になってしまう恐れがある。また、活火山としていつ噴火するかわからないという危険がある点、登山道が整備されていないため、上から落石の危険性が伴う点などが挙げられる。

- ・可能性

これまでの優位点や課題を踏まえて、硫黄岳をメインにした長期滞在ツアーを狙うこと



が可能ではないかと考える。硫黄岳の様々な魅力の中で、大自然を感じることができることに加え、地層について学ぶことや硫黄の噴射など、学門的な優位点まで感じることができたため、長期に渡ってこの山についての調査をしたり訪れるほどの観光資源であると言える。

### ③ 東温泉

日本の名湯 100 泉に入っている、人気な観光地の 1 つである東温泉も調査した。大自然の中にある、人がほとんど手を加えてない天然温泉というものに、私は初めて見るだけでなく入湯した。この温泉のロケーションは絶景であり、大海原を見ながら温泉に浸かることができるかなり稀な野外温泉である。暗くなってくると、満点の星空を見ながら入湯可能なため、大変魅力的であると言える。

また、更衣ができる岩で作ったスペースがあった。使用にはもう一度修復が必要であると感じたが、このスペースがあることは温泉の利用において使いやすくなる点だと言える。温泉の温度について、3つの入湯可能な場所があった。ぬるま湯を好む人からかなり熱い湯を好む人まで、幅広く対応できるような温度設定であった。

#### ・課題点

この温泉の課題点として、入湯に伴っての危険性があることが挙げられる。

天然で人がほとんど手をつけていないという優位点がある一方、問題点もある。海に程近いため、流されるリスクが考えられることである。海の水面から人が入湯する場所までは 5m 程度だ。そのため、海が荒れている時などに高い波が来た場合、安全に考慮して入湯している場合でも海に攫われる可能性がある。まずは高い波が来た場合、地震が起きた場合に温泉に近づかないことはもちろんではあるが、もしものことを考えると問題点として考えざるを得ない。

#### ・可能性

これまでの優位点や課題を踏まえて、他にはない野外の温泉地としての魅力を備えている東温泉は、サウナや温泉ブームが広がっている若年層や、まだまだ元気である温泉好きのシニア世代を対象として人気が広がりそうな観光地である。また、温泉に入りながらの星空観察も可能であり、硫黄島内での温泉巡りの重要なポイントの 1 つである。

### ④ 俊寛堂

俊寛堂、俊寛像など、最も硫黄島にゆかりのある歴史上の人物で歌舞伎でも俊寛が題材にされ実際に硫黄島に訪れて講演が行われ由緒ある場所である。実際に私たちも訪れたが、俊寛堂に入るまでの道も含めて、大昔にタイムスリップしたような感覚になるくらいの雰囲気をしている。苔の色が鮮やかで、手入れが良くされており、説明看板まであるため、初めて来た人もガイドなしで十分楽しむことができる。

・可能性

平家物語に登場する俊寛ゆかりの地であり、歴史に興味のある、知的好奇心のあるシニア層、歌舞伎の舞台にもなっていることから、そのファン層もターゲット効果が期待できる。

⑤ 坂本温泉

東温泉と並び、大海原を見ながら入湯することが可能である。現在は決壊しているため、利用に関しては復旧作業が必須となる。この場所も海に程近いため安全に関する新しい施策が必要になってくるところが課題点だ。

・可能性

実際にこの温泉を視察した結果、東温泉と並び硫黄島の温泉巡りの1つとして人気が出そうなスポットだと感じた。しかし、現在は決壊中のため利用に関しては新たな復旧作業が必要不可欠だった。

⑥ 恋人岬

硫黄島唯一の恋愛スポットである。この岬から港の方に目を向けると、硫黄島港全体を望むことができる。景観がとても良いスポットであり、夕日が落ちる景色は圧巻。

この岬内に「希望の鐘」もあり、この鐘を恋人と鳴らすと良いというストーリー性がある。

・課題点

この岬のために来島するかと考えると、そこまでの魅力を見つけることは難しかった。

景観がいい場所で鐘を鳴らすだけ、というイメージがあった。

・可能性

この岬にもっと付加価値をつけることができれば来島が期待できるスポットにすることができるのではないかと視察を経て感じた。例えば、鐘の隣に絵馬を括れる小さくとも神社を建立すれば、来訪者受けが期待できる。

⑥ 大浦港

この大浦港は、秘境の雰囲気が漂っていた。硫黄島の港では珍しく、海の色が褐色ではなくブルーなため、素潜りも楽しめるスポットだった。

・課題点

基本的に課題点は見つからなかったが、人目につかない港のため、1人で入水することは危険かもしれない。また、この港に行き着くまでに、長く急な階段を5分ほど降りなければいけないため、足が悪い人や体力に自信がない人にはおすすりできないという課題点が見つかった。

・可能性

硫黄島の港として珍しい南国の海の感覚が味わえるスポット。また、秘境の雰囲気があるため、プライベートビーチの雰囲気も味わえる。アクセスも悪くなく、何も手を付けずにも観

光客が訪れたいと感じるスポットの1つだと考える。

#### 4) 硫黄島での体験学習、交流について

##### ①畜産農家訪問

私たちは3日目に硫黄島の畜産の状況や現状、それを活かした観光資源が開発可能かを検証するという目的を持ち畜産農家に訪問した。

##### ・説明内容

###### a 施設の概要

###### b 牛が成長するまでの流れや飼育方法の説明

###### c 牛にミルクあげ体験、有刺鉄線の設置の一部分の協力

##### ・検証結果

この島だけで生産から出荷までの一連の流れや流通経路を知ることができる。また、鹿児島は日本一の和牛生産地であり、さらにこの硫黄島も移住者には牛を1頭プレゼントするなど、飼育に力を入れている場所であるため、本格的な飼育を見学できるなど学習効果が非常に高い。そして、硫黄島の広大な土地を使った畜産を行っているため、受け入れ体制が必要であるが、少人数であれば見学客の受け入れや畜産体験の実施が可能。

##### ・課題点

現在2名という少人数で経営をされていて、さらに広大な土地の中で飼育をしているため、脱走する牛がよく現れるなど、全てを管理しきれていないという現状がある。また、カラスやネズミなどの生物による被害も挙げられる。特にこの島ならではの課題として、孔雀の糞のなかに含まれる細菌などが牛に悪影響を与え下痢を起こしてしまい、飼育をより困難にさせるといった内容も挙げられる。

##### ・可能性

これらを踏まえて、仕事を通じての就労体験というような内容ならば地域交流を図れるのではないかと考えた。今回の自分たちの考えにもある、大人数ではなく少人数の受け入れをするという点と、学習意欲のある方をターゲットにするという点がこの畜産体験に結び付けられると考えた。まず小人数の受け入れでは、やはり飼育などを全て二人でやっているため、大人数の来客が一度に来てしまうと、畜産家の方は全てに対応することが難しくなる。さらには牛の方に目を向けていないといけないので、畜産家の方にとってかなり負担になってしまう。次に、学習意欲のある人を呼び込むという点では、まずこの畜産体験を通して、畜産の仕事内容や牛の成長から出荷までの流れを見ることができるよう非常に学習効果が高い体験ができるだろう。そのため、このような仕事、牛に興味がある人や将来の仕事を選ぶ際の一つのきっかけが欲しい人などがこの畜産体験に向いていると考えた。身近な例を挙げるならば、島に修学旅行生を受け入れてその中から希望者を募り、畜産体験を行うといった内容が挙げられる。この経験によって子供たちの視野を広げることが可能になるだろう。このように実際の畜産の仕事を通して就業体験ができるため、畜産への理解が深まる経

験をすることができるだろう。一方で、畜産家の方も本来のやるべき仕事があるため、来客の対応をするとなるとさらに手間がかかってしまう。そのため、この畜産に興味があり、積極的に仕事を手伝ってもらえる方の少人数での受け入れをするべきだと私は考えた。

#### ・所感

この牧場は魅力的な資源は有してはいるが、従来の観光地のような受け入れ等が他と比べて難しい場所であるため、小人数で規模を小さくしたうえで参加者と交流を深められるアイデアを考えていくことが大事だと感じた。またこの畜産体験では特に、畜産家と参加者の関係は互いにメリットがあるようにすることが大切だと考えた。例えば就業体験を行った場合、畜産家の方にとっては自分の仕事を他の人に手伝ってもらえるため、自分の負担が減り、参加者は畜産の仕事を行うことができ勉強になる、知見を深めたりなどといったメリットが挙げられる。このようなメリットがあれば、互いにこの交流に積極的になり、さらなる交流も深められるのではないかと考えた。自分もここまで詳しく牧場や畜産のことに触れたのは初めてだったため、畜産体験は非常に良い機会を得ることができた。そして一番大切なのは、畜産農家の方々の理解と協力をしっかりと得ることが必要不可欠である。

#### ②ジャンベスクール訪問

私たちは5日目に硫黄島にあるジャンベスクールに訪れ、施設見学やジャンベスクールへの聞き取り調査、ジャンベ体験を行った。硫黄島ならではの文化の一つであるジャンベの魅力や特徴を理解し、この島とジャンベがどのように結びついているのかを確かめるという目的のもと調査を行った。また、このジャンベを通して、どのような地域交流の活性化を図ることができるかといった内容も調査の目的の一つとして挙げられる。以下は責任者の徳田さんへの聞き取り調査を通して、ジャンベやジャンベスクールについてわかった情報のまとめである。

- a ジャンベを演奏している奏者の年齢層は若者が少なく、特に30代より下のジャンベ奏者が少ない
- b ジャンベ奏者の数は2000年がピークで、そこから徐々に減少している。
- c 日本全国にジャンベを演奏するグループがある。
- d 人の手や気分によって音が変わるのが魅力。
- e 硫黄島に訪れるジャンベスクールの留学生は初心者が多く、経験者が少ない。
- f ジャンベスクールの受け入れ人数は4~5名が限界。
- g ジャンベやジャンベスクールのことを知るきっかけは様々ある（ジャンベやジャンベスクールのことを知るきっかけは、インターネットや知人の紹介が多い）

#### ・優位点

他の島にはない、日本で唯一の硫黄島独自の歴史と由緒ある郷土文化であるため、大きなアピールポイントの一つとして挙げられる。また、ジャンベは誰でも簡単に音を出し演奏することが可能なので、幅広い年齢層をターゲットにすることができる。そして、ジャンベを学

べる学校が実際にあるため、そこでの体験などを行えばジャンベの理解を深めることができるため、非常に学習効果が高い。

#### ・課題点

私たちがジャンベの知識はあまりなく、ジャンベに関わるコミュニティも小さいと仰っていたため、魅力的な観光要素であるにも関わらず、それを知る機会が少ないという点が挙げられる。そのため、誰でも演奏できる楽器ではあるが、若い世代のジャンベ奏者が少なく、年齢層が上がっているという課題も挙げられるだろう。そして、ジャンベスクールの受け入れる側の限界もあるという点も課題の一つとして挙げられるだろう。

#### ・可能性

今回の計画では長期滞在を推進するために、ジャンベの長期練習を行い最後には島の人たちに発表するというジャンベ留学生よりも少し規模を小さくしたようなワークショップを考え、長期の滞在により参加者の使う観光滞在消費が増加し、それが消費の活性化にもつながるだけでなく、参加者がジャンベの理解を深めることも可能になると考えた。また、最終的に達成する目標というものがあることで、それを達成するまでは島に滞在したいという心理が働き、長期滞在を促す効果が期待できる。そして、このプランではジャンベを教える指導者が複数必要になり、将来、硫黄島学園の子供たちや島民の方々が参加者にジャンベを教えるというアイデアも考えられる。これにより、様々な人との交流が可能になり、ジャンベを通してさらなる交流人口の拡大に期待ができる。特に、修学旅行やゼミの合宿などで若い年齢層を受け入れることで、それをきっかけにジャンベを本格的に学んでくれる可能性もある。そのため、若者にジャンベを演奏する機会を与えることがジャンベの若者不足の課題解決にも繋がると考えるので、もっと若年層に目を向けることを意識すべきなのかもしれない。

#### ・所感

私がジャンベの演奏を始めて見たのが、ジャンベ留学生の卒業式での演奏だった。この演奏はこれまで見たことがなく異国を感じさせるようなものだった。また、ダンスとジャンベの組み合わせがとても華やかで、ジャンベを叩いて出る音は非常に迫力があり、心を揺さぶるような力強い演奏に見とれてしまい、気がつけば演奏が終わっていたことは非常に印象に残っている。さらに、私も実際にジャンベ体験をしてみて、音は簡単に出すことができるが、様々な要因で色々な音が出せるようになるので、非常に楽しく演奏できるだけでなく奥が深い楽器だと感じた。こういったジャンベの魅力や良さを理解し、この郷土文化を体験して得られる感動はもっと知られるべきだと強く考えた。そして、このジャンベを硫黄島で継承していくために、やはり若年層のジャンベへの理解が必要不可欠になってくると考える。そのため、島の子供たちだけでなく外の人たちに向けても、硫黄島のジャンベ文化を周知させることが大切だと感じた。また、ジャンベは簡単にでき、皆で演奏することも可能であるため、誰でも音楽の輪に入ることができるというメリットもあると考える。個人でジャンベを体験するよりは団体でジャンベ体験を行い、ジャンベの練習や全員で演奏をするといった

体験を通して、その団体の絆を深めるきっかけを作ることができるとも考えた。このように硫黄島のジャンベはとても魅力的であるにも関わらず、特定の層、地域にしか知られていないことが不思議であると感じた。この島独自の文化をさらに発信していくことが、交流人口を図る上で、とても大切なことだと思った。

### ③ 三島村立三島硫黄島学園訪問

硫黄島学園は2020年から小中一貫制を採用しており、1年生から9年生（小学1年生から中学3年生）までの生徒（24人）が在籍しており、そのなかには「しおかぜ留学」制度を利用して他地域、他県から硫黄島へ来た留学生もいた。また、日本だけではなく海外からの生徒も在籍していた。この生徒たちの学年をミックスした3つのグループに分け、それぞれのグループに大学生一人ずつ加わって以下の質問をした。

- a 思い描く将来のビジョン
- b 硫黄島が今後どうなってほしいか
- c 島の子供から見た硫黄島の魅力
- d 硫黄島に観光客が来てほしいか

#### ・検証結果

これらの質問に対する回答は以下のとおりである

質問 a に対する回答・・・

- ・教員免許を取得してから硫黄島に教員として戻ってきたい（外国語、理科、養護教諭）
- ・ウェディングプランナーの勉強をして、硫黄島のような離島でも気軽に結婚式を挙げることができるような仕組み作りをしたい
- ・島に美容院がないため、島内で髪を切ることができるように美容師の免許を取得してから硫黄島で美容院を開業したい
- ・硫黄島ではなくほかの地域で一級建築士として活躍したい
- ・調理師免許を取得して硫黄島に戻ってきたい
- ・薬剤師になりたい
- ・硫黄島に限らず、様々な地域でファッションデザイナーとして活躍したい
- ・進路は明確に定まっていないが、硫黄島で仕事をしたい
- ・クリエイター、YouTuber になりたい
- ・イラストレーターになりたい
- ・動物病院の先生になりたい

質問 b に対する回答・・・

- ・11月上旬にあった「ママディ・ケイタメモリアル in 三島村」は、様々な地域からたくさんの方が硫黄島に来てくれたおかげで島が盛り上がり、とても楽しかったため、このような大きなイベントをもっと開いてほしい
- ・もっと島民は増えてほしいとは思いますが、学校は少人数制を継続してほしい

- ・観光客数を増やしてほしいが、治安が悪くなることは避けてほしい
- ・島が無人島になることなく、第二の地元という存在で一生残ってほしい

質問 c に対する回答・・・

- ・地域の繋がりが強く、皆の仲が良い
- ・歴史的な祭り、文化がある
- ・自然豊かな場所で、景色がとても良い（毎日違った景色を見せてくれる）
- ・硫黄島独自の生態系がある（クワガタ、クジャク）

質問 d に対する回答・・・

（来てほしい）

- ・人が来れば島が活性化するから
- ・硫黄島の魅力や良いところ、他の島と違うところを知ってほしいから
- ・硫黄島に住むきっかけになりうるから

（来てほしくない）

- ・人が多く来ると自然がなくなる可能性があるから、自然の良さをなくしてほしくない
- ・治安が悪くなる可能性があるから

#### ・可能性

子供へのインタビューを通して、島に残りたいという意見と、他地域・他県に出て行ってしまうという意見がほぼ半分ずつの割合であるということが分かった。また、子供たちはより多くの観光客に島に来てほしいと思っているようだが、一方で治安の悪化や自然の破壊を危惧している子供もいた。このことから、今の若い世代が島に戻ってくることで、将来の島の中心となる労働力となりそうだ。今後の島の教育に対する考えとして、義務教育以上の高等教育やさらにその上のレベルの教育ができる通信制の教育機関を島に設置する考えがあるということも聞くことができた。これが実現すると、子供たちの将来に対するビジョンの広がり、島の活性化が期待できるだろう。

#### ・所感

中学3年生は高校受験が迫っているということもあってか、将来に対する考えはあらかじめまとまっていたようだった。一方で意外に思ったのが、小学校低学年の生徒たちも将来についてよく考えているようで、どんな場所でどんなことをしたいかということ詳しく話してくれた。初めて島の教育機関を訪問し、子供たちと交流したことで都会の子供たちとの違いに気づいた。それは、島の学校は少人数制であり、これには友達が少なく寂しいということや、人数が足りないために部活動をするのができないといったデメリットもある。だが、少人数制であることによって、都会の大人数クラスだと起こってしまいがちな「誰かがやってくれるだろう」ということがないため、活発にコミュニケーションをとることができ、自ら積極的に意見を言うことができるのだろうと感じた。硫黄島に住んでいる子供たちならではの貴重な意見を聞くことができた。

#### ④ 三島村観光案内所訪問

三島村の観光案内所を訪問させていただき短い時間ではあったが意見交換をすることができた。私たちは硫黄島へ入島する前に行った「交流人口の拡大を図るための観光振興の方策について」という議題のミーティングで、近年日本各地で行われている、ボランティアの子供が観光地で行うツアーガイドを硫黄島でも実施してはどうかの質問に、過去にこの施策を実施していた頃があったが、子供に悪影響を与えてしまう事象（ツアーガイドをする子供への観光客からのクレーム等）があったため、現在は行う予定はないという回答であった。過去に高速船が島に入港したことがあったが、島の宿泊施設や観光施設のキャパオーバーが発生してしまったため、こちらも望ましくはないという回答であった。

ほかにも以下のような回答があった。

- ・秘匿された存在であることが大切であるためプロモーション等は望んでいない
- ・島の容量の関係で、観光産業は島の主要産業ではない
- ・島をガイドする人材が不足している
- ・島民たちの観光地化に対する意見は二分化している
- ・大勢の観光客が来るのではなく、少人数のグループが長期滞在することを望んでいる

#### ・所感

高速船の定期就航は硫黄島が行きやすい島になるというメリットがある一方で、長期滞在の妨げになってしまうということや、実際は島民全員が交流人口の拡大を望んでいるわけではなく、島外部が求めているものと島内部に携わる側との意見の相違があるようだ。

#### 6. 現地調査（検証）結果を踏まえての観光交流の可能性（提案）

来島後（調査後）のイメージは、離島ということでのアクセスの不便さもあり、又受け入れる側の宿泊施設のキャパシティから、今以上に来島観光客が増加するのは、やはりなかなか難しいと改めて思う。そこで、少ない来島観光客を長期滞在させることで、観光消費を促すことが効果の上げやすい具体策であろう。この島の利点でもある、神秘的なで野性的な硫黄岳、それを取り巻く矢筈岳、稲村岳、来島観光客の価値観を変える要素は兼ね備えていると考える。また、アクセスの不便さが逆に長期滞在を促す要因にもなるのかもしれない。2015年に「三島村・鬼界カルデラジオパーク」登録認定により、学びに意欲のあるアクティブ層、自然に興味のあるネイチャー志向層に訴求し易くなり、その層に受け入れられる可能性が非常に高くなった。その層は、繰り返し来島する可能性の高いハードリーピーターとして期待ができる。これを繰り返しながら、長期的に思考し、来島者が増えていけば、雇用も広がり将来の移住者、それが定住者へとつながる要因にもなり得るであろう。やはり、長期滞在に向けた施策が必要だと改めて思う。

以上を踏まえ、これからの取り組みとして、以下の項目に着眼してみた。



- 1) 学びに意欲のある人をターゲットにしたプランを提案  
(来島者、プラン提供する側、互いにメリットが生まれることがポイント)
- 2) 長期の滞在を提案  
(離島の滞在は、時間を忘れることができ、島の理解を深めることも可能)
- 3) 過度な開発はせずに、島の特性を活かした観光計画の提案  
(持続可能な SDGs にもつなげる)
- 4) 離島硫黄島の持つ独特な自然と文化と島民との交流、ふれあいを通じて、その楽しみ方を「遊ぶ」、「学ぶ」、「暮らす」というキーワードを提案  
海と山で遊ぶ、世界でも稀な離島のジオパークを学ぶ、平家とゆかりのある地を学ぶ、島の滞在を暮らすように生活してみる。都会の雑踏を離れ、非日常な場所での時間を忘れての滞在は、豊かな時間の消費行動と言える。

## 7. 硫黄島ならではの！

いくつか離島「硫黄島」ならではのポイントとその効果、利点について触れてみたい。

- ・離島だからこそその非日常感をたっぷり味わえる「硫黄島」、そんな場所であっても今回宿泊した施設すべてが Wi-Fi 対応されており、都会を離れてのワーケーションも可能である。
- ・世界でも稀な「離島のジオパーク」で、専門的なネイチャーガイドによるガイダンスは、セミナーを受講しているほどの価値が訴求できる。
- ・約 7300 年前縄文期の噴火でできたカルデラ、その姿は神秘的で野性的な硫黄岳として今なお噴煙を上げ続けてる。
- ・その硫黄岳がつくる褐色とライトブルーのコントラストの美しい海岸線、水中カメラマンによる水中からの撮影はまるでオーロラを想わせる海中、そしてライトブルーの海原を泳ぐウミガメ、今回の調査で偶然にもそのウミガメの泳ぐ姿を発見することができた。この姿がとても印象的、記憶に鮮明に残った。
- ・硫黄島のソウルミュージック「ジャンベ」、異国を感じさせるダンスとリズムは、その歴史、硫黄島との出会い、関わり、長き交流から育まれてきたものだと学んだ。全国から毎年、ジャンベ留学生がやってくるアジア唯一のジャンベスクールで、一時の来島観光客であってもその体験は価値あるものだと、記憶に残る楽しみ方の要素をもっている独自の郷土文化だと感じた。

## 8. 長期滞在を可能にする具体策として提案

- 1) 鬼界カルデラ、ネイチャーゼミナールの開講
- 2) 険しい硫黄岳への安全なネイチャーガイドコースの拡充
- 3) 将来的にネイチャーガイドの複数育成
- 4) 緩やかな稲村岳のハイキングコースの整備、拡充

- 5) 島内、沿岸のサイクリングコースの整備、拡充
- 6) マリンスポーツの配備（カヤック、シュノーケリング、フィッシング）
- 7) 天体観測、星空教室、夜光虫鑑賞
- 8) こどもガイドの養成（硫黄島学園の生徒たち）
- 9) ジャンベの体験、ワークショップ開講、複数の指導者育成
- 10) ダイビングスクール開講（専門的な人たちのスポットとして周知）

\* 今すぐできること、時間のかかること、安全の確保が優先されることなど問題点、課題はたくさんあると思うが、一つ一つその可能性を検証しながら前に進めることが必要であろう。

\* こどもガイドの養成と記したが、数々の問題、安全性などいくつかのハードルはあると思うが、訪問した硫黄島学園の生徒さんたちは、社交的で快活で元気もよくて人懐っこく、しかも島の知識も高く、きっと日々指導される先生方の勉強もさることながら、生活、文化面での指導の賜物だと感じた。この生徒たちのスキルであれば、充分「こどもガイド」として役割が果たせ、来島観光促進に貢献する可能性を秘めている。校舎の裏の池は、硫黄島の模型のような形になっており、こどもたちが楽しそうにその池で島の説明をしてくれた。観光庁の観光普及促進事業に、子どもたちの「旅を愛する心」、「地域を愛する心」を育む。観光立国を実現するため次代の地域観光促進を担う人材の育成。感受性豊かな児童、生徒たちの知識、マインドの更なる向上。などが織り込まれているが、まさに来島観光客向けのサービスとして成り立つ可能性を感じた。このことが郷土を愛する心が醸成され、将来のUターン、定住、そして移住につながる可能性を秘めるものだと思う。

## 9. ターゲットの選定

- 1) ネイチャー、アドベンチャー志向者層
- 2) アクティブシニア層
- 3) 教育旅行
- 4) ダイビング愛好者、釣り人
- 5) 企業研修、企業の福利厚生としてワーケーションの推進
- 6) 大学生のゼミキャンプ

\* 6) 以外は、ターゲットとしてすぐにでも訴求できる層である。

## 10. まとめ

交流人口を拡大することからの過度な来島観光客は、様々な問題を引き起こし、経済効果を見込む以上に、一時的な不特定な来島観光客が増加すれば、その者たちのモラルの低下、トラブル・クレームの増加、ごみ問題、観光騒音、フードロス問題、島民との軋轢、ひいては郷土芸能の俗物化にもつながりかねない。そもそも受け入れる島側の客室

キャパ不足、そのための改築・増築、インフラ整備にも費用がかかり、それに見合う利益が必要になり受け入れ側の疲弊が懸念される。

つまり、不特定多数の来島観光客を望むものではなく、専門性を好む特定層のマーケットの良識のあるハードなリピーターになりえる層に取り組むことが「硫黄島の交流人口の拡大を図るための方策」と考える。今回の調査の結果として、交流人口を今よりも少しずつでも増やしながらか、観光消費額を拡大させる！！そのために、長期滞在客の誘致を図るべく受け入れの準備をできるところから進めることを提言する。

#### 11. 発表会参加者からの質問、意見、課題について

・発表会の後、いくつかの質問、意見を頂いた。その場での回答は→のとおりである。

1) 首都圏からの来島者が一人当たりの費用6万円払って来るだろうか？

→時期、内容にもよるが、私たちの今回の硫黄島までの往復移動費、硫黄島滞在費用、鹿児島での前後泊費用など合わせると、一人当たり約6万円程度であったが、目的意識が明確にあり、その費用対効果を考えれば、硫黄島という離島での体験はその対価に見合うものであると考える。

2) 宿泊先で提供される食事以外に、自分たちで食材を用意しバーベキューなど自炊のキャンプ体験もするとよかったのでは！？

→確かに、最初の宿泊先であるイオキャラバンパークはキャンプ場としての施設として可能な要件を満たしてあるので、やることも可能であったが、初めての調査事業ということもありその余裕が今回はなかったが、次回に機会があれば是非行いたいと思う。

3) 長期滞在者をターゲットにすることは、今までにない考え方で可能性を感じた。

→私たちの提案に関心を持っていただいた結果と考える。

4) 来島者が増えれば、病人、ケガ人などなど、緊急体制も整えねばならないが、現在はその体制下ではなく、並行して検討せねばならない現実でもある、ということも知ってほしい。

→そのとおりであると考え。来島者を施策的に増やす、増える場合は、その取り組みと同時に、必要に応じて、あるいは速やかにその体制を整えねばならないと思う。

5) フェリーの運航状況、フェリーの定員数、宿泊先の状況から来島できる人数には制限がある。その中で、観光事業として収支が成り立つシミュレーションも考えて欲しい。

→今回はそのシミュレーションは用意できなかった。今後の課題としたい。

帰着後の報告書の末筆ながら、前出の5)の回答に少しだけ付け加えておきたい。

<来島者数が増え、長期滞在者も増えていけば、滞在中の楽しみ方としての着地型旅行のバリエーションを増やすことで、それに関連する手配、送迎、案内人、食事(弁当、スタンド、レストラン等)などの観光に関連する仕事も増える可能性がある。また、体験型レ

クレーション、カルチャーとしてジャンベスクールでのワークショップなども長期滞在での楽しみ方の一つとして考えられる。それらに付随する、グッズ、記念品などの販売にもつながる可能性がある。起業する上での事業計画、収支計画表と同じように、観光収支を目論むための収支計画は今後の課題としたい。>

以上

☆主なお世話になった方々（順不同）

二階堂出張所長、玉利観光所長、地区長の徳田さん、畜産農家の米村さん、イオキャラバンパークの今別府さん、ネイチャーガイドとして案内してくれた地質学者の大岩根博士、民宿マリンハウス「孔雀の里」の女将さん、民宿「ほんだ」の女将さんご主人、ジャンベスクールの徳田さん、硫黄島学園の石岡校長先生と曾根教頭先生と各先生方、そして生徒の皆さん

末筆ながら感謝申し上げます。

ありがとうございました。

☆参考文献

・鹿児島県三島村ホームページ